

## 洛書

## 大学法人化と自由の学風

平野 丈夫



理学研究科に教授として着任してから9年になる。専門の異なる教員の知り合いも増え、理学部には実に多様な人々がいることを実感し、そうした環境を楽しんでいる。一方で研究・教育以外の仕事も多くなり、昨年末からは副研究科長を務めることになったが、雑務を楽しむ境地にはなれそうにない。さて、この間に大学では法人化という大きな変化があり、大学運営のルールが大きく変わった。新ルールに適した体制の見直しが必要と思われるが、それは困難な仕事となっている。なぜなら、国立大学は予算・定員削減と同時に多くのことを求められているからである。国立大学法人に適用される法規変更・入学生の多様化・情報公開・大学評価等への対応措置、地域社会・産業経済活動への貢献、女性・障害者への配慮等、実に多くのことが求められ、さらに大学の存在価値・社会への貢献を目に見える形でわかりやすく説明するように要求されている。

各々もっともなことであり、大学をよりよくするための改革を進めるのは当然であろう。ルールが変わったのであるから、以前認められていた事柄をただ既得権だと主張することはいかがかと思う。しかしながら、各々は正しいことであろうとも、全体の状況をよく見極め足元をしっかりと確認しながら変革を進めないと、落とし穴が待っているかもしれない。

教員・職員および予算削減の中での仕事増が、私たち教員の本来の職務である教育・研究の質を低下させてしまうことが懸念される。質の低下はすぐにはわからないかもしれないが、中長期的に大学を侵し、我国の国力すら削ぎかねない。京都大学のキャッチフレーズは「自由の学風」であり、学生にも自学自習を促している。しかし自学自習は落伍者を生みやすい方針でもある。その実効性を保障するためには個々の学生に応じたきめ細かい配慮が必要であり、高コストを払う用意がなければ教育効果のレベルを維持することは困難なシステムである。私は学生と研究の検討を行う際、まず彼らの話に耳を傾け、彼らが考えた実験のアイデアは、安全性・費用面で

支障がなければ、たとえ成功の確率が低いと思ってもできるだけ自ら試させ、学生自身が納得する形で研究を進められるよう配慮したいと考えている。しかし、最近では学生の失敗を辛抱して見守る余裕がなくなっているように感じる。研究についても、すぐに役立つわかりやすい貢献が強調され過ぎているように思う。大きなブレイクを生む発想には遊び心が必要なのではないか。また、複雑な現象の深い理解には、ゆったりと集中できる思考時間が必須であろう。「ゆとり教育」も理念は悪くなかったと思うが、それに必要な初中等教員の質と量を十分手当てせずに実施したことにより、ないものねだりをしただけのような実効性に疑問がつく事態になってしまったのではなからうか。真のゆとりが必要である。

京都大学に限らず国立大学法人の置かれている状況は厳しい。無駄な意味のないことを取りやめ、合理的で柔軟な運営が必要であろう。その上でも、大事なことをより大事なことのために断念せざるをえない事態にすらなっているのではなからうか。最近、分野・専攻・研究科各々のレベルの会議で深刻な議論を行い、捨てるべきものを当面あきらめるという苦渋の判断をした。大学レベルでも、見識ある優先順位の判断が重要になっているのではなからうか。申請書や評価関連書類では、すべてに対応するといった優等生的な文書を書きたくなくなるが、場合によっては現状を直視し熟慮しての断念・縮小が正しい決断になることもあろう。萎縮は禁物であるが。さて、京都大学にとってもっとも重要な事は何であろうか。質の高い教育・研究を実施できる場を提供し、各構成員がそこで各々の目標・能力に応じて、我が学風で自らを高める充実した時を過ごせる体制を構築することではなからうか。問題は、それをいかに実現するかである。

(ひらの ともお 大学院理学研究科教授、専門は神経科学)